

第48回 最終回

人と大地に 魅せられて

北海道に移住して約10年。東京出身の私にとって、この地の暮らしは驚きの連続。
出会った人々、食や自然に魅了された数々の体験について取り上げます。
今回は、道北のとあるまちでかごを編む「かごあみ絲」の活動を取材しました。

「かごあみ絲」の工房。作品はオンラインストアで購入可能。 <https://kagoamiito.official.ec/>

普段使いのかごを、みんなでつくりみんなで楽しむ

ヨーロッパのマルシェがきっかけ

数年前、北海道の手仕事の品を集めたイベントで、六角形の編み目の竹かごを購入した。そのときもらったパンフレットによると制作したのは「かごあみ^{いと}絲」。「北海道の中でも、とりわけ豊かな森林に恵まれた町で、かごを編んでいます」とだけ書かれていた。住んでいる地域も名前もわからなかったけれど、気取らない表情の手に馴染むカゴに惹かれた。

昨年末、本棚にあったそのパンフレットを見つけ、かごが生まれた場所に行ってみたくなった。知人を介してコンタクトを取ることができ、一月下旬に道北のあるまちを訪ねた。

名前をたずねると、屋号となる「かごあみ絲」と呼んでもらえればいいという。それはブライベートを隠したいからではなく、自分に大きなこだわりがないからだと笑顔で答えてくれた。

絲さんは京都生まれ。大学卒業後、大阪の家具販売店で働き、その後、海外に行きたいという思いが募りヨーロッパを訪ねた。長期滞在で魅了されたのはマルシェ。日本ではスーパーで均質な食材を買うことが多い

東京都出身。美術の専門出版社で雑誌・書籍の編集に約20年携わり、2011年に北海道へ移住。

2018年に「森の出版社 ミチクル」設立。北の自然や人をテーマにした本を刊行している。イラストエッセイ『山を買う』など。



手前が根曲がり竹のかご。左奥がシラカバの樹皮、右奥がクルミの樹皮を使ったかご。クルミのかごは、太い幹の部分を大胆に使って仕上げた。

が、それに違和感を覚えたようだ。

「小さなお店がたくさんあって、自分の選択で買っているところに惹かれました」

各地のマルシェを訪ねる中で、普段着で何気なくかごを下げる男性を見つけた。その姿が「かっこいい」と感じられ、かごに興味を湧いたという。

誰かと一緒につくりたい

ヨーロッパから京都へ戻り、次なる道を模索した。かごに関連したキーワードをネット検索したところ、森林の素材を使ってクラフト作家を育てるという北海道中川町の事業を見つけ、旭川で開催されていたイベントに出向いた。そこで役場の人と知り合ったことがきっかけとなり、二〇一

七年に地域おこし協力隊となった。

五月に協力隊として着任し七月にはかごをイベントに出品するというハードスケジュール。技術的には心許ないものだったが、一方で竹かごづくりは性に合っていたという。まず制作するのは素材となるヒゴ。雪深い地域で育つ根曲がり竹(根曲がり竹は山菜名、正式にはチシマザサ)をナタで割ってヒゴをつくる作業は、多くの時間を要し力も必要となる。

「竹を割る技術を習得するのが大変でしたが、この作業にのめり込むようになりました。編むより割るのが好きなくらいです」

竹かごのほかにシラカバやクルミのかごも制作した。それらを販売する活動が続けて七年が経った現在、また新しい展開を探るようになった。

「二つの場所で一つの仕事を続けることに憧れがありました。自分はずねに移動して、価値観をグラグラさせる体験がしたいのだとわかりました」

職人としての技術を極めた工芸品よりも、必要に応じて普段づかいできるものを制作したい。また各地で人と関わりたいたいという思いから、昨年からワークショップを積極的に

行うようになった。

「かごをつくる技術が失われていく中で、みんながつかれるようになったらいいなという思いもありました」

ワークショップでは材料を現地調達する。自分がかごを編むために同じ山に入るのではなく、各地の人と素材を分かち合いたいと考えたからだ。また誰かと一緒にものづくりをしたいという思いから、自身のかごづくりでは、革作家とコラボしたサコッシュも制作。工房も中川町から一時間ほどの場所に移転し、新しい環境に身を置くようになった。今後は人と出会って話を聞き、それを記事にしたり、本やウェブなどで形にする編集者にも興味を抱いているという。

ふと、かごを編むことと、人の思いを編む編集者は、共通点があるのかもしれないと思った。混沌とした状況から縦軸と横軸を整理し、一つの形を浮かび上がらせる。糸さんは、試行錯誤を重ねながら「編む」という行為を続けていくのだと思った。

今回で「人と大地に魅せられて」は終了します。約四年間、読んでくださったみなさんありがとうございます。